

これによれば、落合木工株式会社、大村宇之助経営の木工場が、明治四〇年（一九〇七）初頭に所在していたことが判る。

伊藤組木材株式会社落合工場の進出 本工場の沿革については『伊藤組九十年史』には、次のように掲記されている。

札幌工場については、空知郡落合にあらたに製材工場を設置した。この工場は、既設の工場を買収、機能の増強整備をほどこしたもので、原木の供給源は空知川流域の官林、トマムの自家所有山林、落合付近の民有林などである。

この工場は、大正二年失火により焼失するが、ただちに復旧し、生産を続けた。大正十四年にいたっては、電灯のない落合市街地のために工場機関を活用して発電を開始、灯りを供給した。これはのちに落合電気株式会社として、第二次大戦の終了まで電気供給を続けたが、戦後北海道電力によって統合されている。

伊藤組そのものの沿革大要については、次のとおりである（『前掲書』）。

明治二六年（一八九三） 伊藤亀太郎、札幌に建築工事請負業を創業（伊藤組の創立）。

二八年（一八九五） 北八条西二丁目に移転、挽材業を開始する。

三六年（一九〇三） 小樽出張所開設、その後全道各地に出張所の開設が及ぶ。

四〇年（一九〇七） 北五条西八丁目到家屋を購入、翌年移転す。

合集落とともに歴史の歩みが続けている。

現在の営業形態は、造材、造林、製造（針葉樹一般製材）の三部門で、年間生産能力は、次のとおりである（落合木工場資料）。

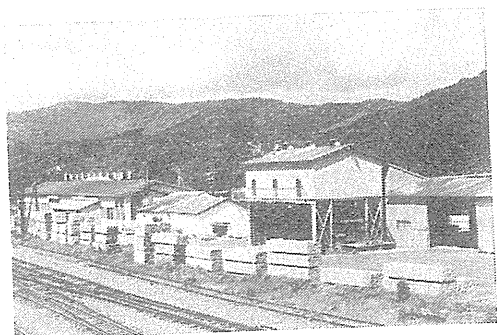
年次	針葉樹製材（m ³ ）	年次	素材生産量（m ³ ）
昭和五五年	一一、一四四	昭和五五年	一九、八三六
五六年	一一、五三五	五六年	二〇、二九五
五七年	一一、四九八	五七年	二六、三七三
五八年	一一、二二四	五八年	二七、一六八
五九年	一一、三二一	五九年	二七、三九二
六〇年	一一、〇二八	六〇年	二五、六六七

従業員の推移は、次のとおり。

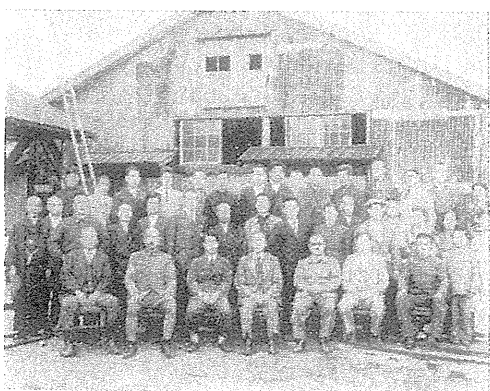
昭和五五年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人
五六年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人
五七年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人
五八年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人
五九年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人
六〇年	男 三〇人	女 〇人	計 三〇人

販路の現況は、主として札幌、小樽、函館と、その周辺の問屋、工務店に移出している。昭和六〇年現在の敷地、建物は、次のとおりである。

敷地 当社分 二九、八一八平方メートル



株式会社伊藤組落合工場（昭和61年）



株式会社伊藤組落合工場従業員（昭和10年頃）

四二年（一九〇九） 苗穂に製材工場開設、同所に鍛冶工場を併設する。
四四年（一九一〇） 朝鮮京城府に出張所開設。落合に製材工場を購入、経営を開始する。
大正一二年（一九二三） 伊藤豊次事業の一切を継承。

昭和二二年 工部部法人化、伊藤組土建株式会社設立。
二二年 鉄工部法人化、伊藤組鉄工株式会社設立。木材部法人化、伊藤組木材株式会社設立。

二五年 伊藤義郎各社の取締役に就任する。
三一年 各社の取締役会長に伊藤豊次、取締役社長に伊藤義郎就任する。

三六年 株式会社伊藤組創立。
五八年 伊藤組創業九〇周年記念式を挙げる。

前記のとおり、株式会社伊藤組木材株式会社落合工場は、明治四四年（一九一〇）七月八日の創立であり、空知川上流域における重要な製材工場として、明治、大正、昭和の三代にわたって、落

国鉄 一四九五平方メートル
旭川土建 三三、二九六平方メートル
建物 工場 一、三三七・二九平方メートル
住宅 二三七六・〇五平方メートル
機械及び装置については、多岐にわたっているが、数種を挙げれば、次のとおりである。
帯鋸機 集塵装置 帯鋸切断機 帯鋸歯抜機 帯鋸接合機 木皮粒砕機 切機 自動研磨機 チップ機 自動送り機 材寄せ機 電気歩出機 帯鋸目立機 自動目立機 車両は四両（運搬車） ショベルローダ他

氏名	就任年月日	氏名	就任年月日
安済 清八	明治四四・七・八	中島 光男	昭和三四・五・一
柄沢 角治	大正一五・三・一〇	山谷 浅治	三九・五・一
齊藤 直治	昭和一六・五・六	東 武雄	四五・五・一
加藤富士松	一九・一〇・一	佐藤 信	五五・五・一
村田 広吉	二二・五・一	黒川 俊一	六一・三・五

幾寅木工場 当木工場は大正七年（一九一八）ごろ創業、宮北清七、山岸甚之助、黒田善八、日下好治らを中心とする合資会社で、蒸気を原動力として操業したが、需要が少なく進展しなかった。しかし、幾寅初期の建設用材などは、総てこの木工場で生産されており、歴史的には大きな意義をもつ工場であった。